上高井教育会報

第133号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　竹前稀市
編集人　会報編集委員長　勝山一男
印刷所　須坂新聞社

自ら求めて

同好会長　大森健嗣

転任した先生方との会話が弾んで、子ども達に関する話題が次々と出されていた時のこと。一人の先生がこんな話をしてくれたのである。

ある日の夕方、所用のため来校した時、先生の車を目ざとく見つけた、かつての学級の男子三人が駆け寄ってきた。日暮れ時でもあり、気は急いでいたが少しの間、立ち話をして別れたとのことである。

用事をすませて帰ろうとすると車のワイパーに何かがはさまれている。近付いてみると野草の花を四ツ葉のクローバで束ねた小さな花束である。

「えっ、あの子たちが…。あの男の子たちが…。」と思うと胸がキューとしめつけられ、目がしらが熱くなった。帰途、車を運転しながら、なぜか胸がつまり、フロントガラスが曇って困ったとのことである。

「先生、あの男の子たちがですよ。」とその時の様子、感動をよびもどすかのように熱っぽく私に話してくれたのである。それは、昨年の事であった。

数年間、指導してくれた担任の先生、その先生は転任して行ったが、別れた先生の声が、教えが、この子ども達の心に残っていた。

先生の指導が、やさしい心が、先生の人柄から発する温かい雰囲気、懐かしいにおいが、確かに子ども達の心に定着していた。

離れて行った先生に寄せる子ども達の想いが野の花を四ツ葉のクローバで束ねて、懐かしい先生に贈らなければいられない心温まる小さな行動をおこさせた。そうせずにはいられない子ども達であった。

今、教育の世界に不祥事をも含めてさまざまな問題が次々と提起され、学校教育が厳しく問われている。教育の基盤である学校や教師の信頼度までが低下し、時に、不信の声さえ聞こえてくる。「かつての信州教育」は何処へいってしまったのかという悲痛な叫びまでもが…。

そんな時代であるだけに、先生と子ども達との血のかよった信頼関係にあるこの話を、明るい話題として聞いたのである。

時代が移り、教育制度がどう改善されようが、日々の教育活動を通して子ども達とじかに接触し、影響を与えていくのは教師である。そして、小―中学生という成長過程にある子ども達の教育にたずさわる我々は、その保護者と同じように、子どもの人間形成に深く、大きくかかわっているのであり、人一人の生涯に大きな影響を与えることになる。その点を深く認識しなければならない。

また、学校単位でとらえても、学校としての機能を果たしていく上で、教師一人ひとりの果たさなければならない役割は重く大きく、学校教育の成否は究極のところで教師の力量にかかってくる。

結局、教育は教師の問題にいきつく。「教育は人なり。」である。

したがって、教師自らが教師としての自覚を高め、自分自身を人格的に磨き、教師としての力量を向上させていく研修が強く望まれてくるのである。

長野県下、また、本郡に於いても、教師の研修活動は随分と活発に行われている。にもかかわらず、教育諸問題のみか、教師についての問題もまた少なからず提起されている現実をみる時、研修の質にかかわってこざるを得なくなってくる。この質の問題は、尽きるところは教師一人ひとりの教師としての自覚が問われていることになる。

研修は本来、自主的、自発的なもの、内から発する意欲的なものである。その意味での本郡に於ける組織的な会が同好会であり、同好の士が相寄って独自の計画に基づいて自主的な研修がなされている。同好会は教育会の大きな事業であり、各会がそれぞれの歴史と伝統をもっており、内容の濃く、質の高い研修を行ってきたのである。永年にわたり中央から得難い立派な講師を招いて研修している会もある。

大勢の先生方の参加と同好会のいよいよの発展を望む。

（旭ケ丘小）

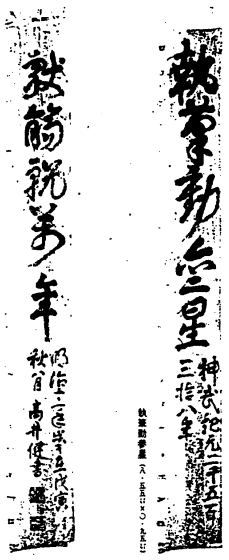
教育会だより

7・4　研究委員会(2)
・11　第4回常任委員会
・14　臨時研究世話係委員長会
・17　上高井教育会報第132号発行
―第13回教育懇談会特集―
・18　第5回代議員会
・20　教研集会会長・司会者打合せ会
・28　上高井教育七団体連絡会結成会
8・30　第1回上高井教育七団体連絡会代表者会
9・4　第5回常任委員会
・5　教研集会中間連絡会
・14　第6回代議員会
信教各種研究調査編集委員会中間報告会(1)
・22　上高井教育会報第133号発行
10・6　上高井教育研究集会　於墨坂中学校
・23　第6回常任委員会
・27～28　第41回日本連合教育会徳島大会　本会より5名参加
・29　上高井郡市PTA研究集会　於須坂小学校
・31　第七回代議員会

郷土の文化財 ⑧⑨

田ノ中神社の幟

須坂市　西町



高井鴻山が七十三歳の時に揮毫したと言われている。「執筆動奕星」「献觴祝萬年」と記されている。読み方は執筆奕星を動かし、献觴萬年を祝す。書を書いて輝く星を動かし、盃を献て長寿を祝すの意である。

（望月）

夏季研修会に参加して

―― 夏休みは我々教師にとって、研修を積むよい機会となります。――
―― 本年度も多くの先生方が研修会等に多数参加されました。――
―― その中から貴重な体験感想をお寄せいただきました。――

カウンセリング等生徒指導研修講座に参加して

加藤康恵

「それでは、両手を前に上げて、目をつむって下さい。そして、三回程回って歩き、手が触れ合ったら、目をつむったまま、出身地をなのり、相手を感じ合って下さい。」との指導者の先生の言葉に、びっくりし、ハラハラドキドキする私。そして、カウンセリングの研修って堅苦しいものと思っていたのが、活動的でおもしろそうなものだと、まず初めに感じました。事実三日間の研修は、興味深いものが多く、参加された先生方とも親しくなり、有意義なものとなりました。特に、二つのことが心に残っています。

一つは、自己をみつめられたことです。パートナー（先に述べた目をつむって、手を触れ合った人）と、自分の長所や夢、悩みなど語り合った時などは本当に困ってしまいました。短所は、いくらでもでてくるのですが、長所は日頃考えた事もないだけに、苦労しました。時間も一つにつき三分間と決まっていて、三分間がこんなに長いものかと感じました。しかし、私のパートナーとなった彼（新卒二年目の中学校の先生）が一つ一つうなづきながら、私の話を熱心に聞いてくれるので、それに励まされて、何とか語ることができました。自分を語ることによって、自分というものが、客観的に見れた気がします。

また、二日目に行ったYG性格検査も、自己をみつめる良い機会となりました。そして、YG性格検査の活用法は、学級経営の上で、大変参考になりました。例えば、A子さんの抑うつ性が大きく思考的内向性が強いという結果をどうみたらよいか話し合った時、物事を深く考え、感受性が強いという良い面を伸ばして読書をすすめ、自己を見つめる目を育てさせようという事になりました。私だったら、きっと、A子さんの結果を短所とし、困った子だと思ってしまったでしょう。これを生かし、子どもを見る目を養っていきたいと思います。

二つめは、カウンセリングマインドを学んだことです。カウンセリングマインドとは、教育相談的発想のことで、相談者を、受容し、共感することです。

先日のことです。五歳の姪が、「お母さんと、一緒に行く。」と言って、泣きじゃくり、お母さんから離れなくて困っていました。周りの人が、いろいろとなだめすかすのですが、全く泣きやまなかった時のことです。私が、ふと、カウンセリングマインドのことを思いだし、姪の背中をさすりながら、「みえちゃん、お母さんと、一緒に行きたいんだよね。」と言うと、不思議にも泣きやんだのです。そして、しばらくしてから、「お母さんの所に行きたくなったら、必ず、連れていってあげる。」と私が言うと、安心したのか、お母さんから離れ、見送ることができました。（本当のカウンセリングは、受容するだけで、指示を出してはいけないので、後者の言葉は、いらなかったかもしれませんが…。）これからも、活用していきたい。

（仁礼小）

「塩の道」巡検

新井進

今年の夏休みは、恒例の地歴同好会夏季巡検（塩の道巡検）と書道同好会夏季講座に参加した。どちらも充実した有意義な研修であった。

× ×

「塩の道」巡検は、七月二十九日（土）、市川健夫先生、青木広安先生を講師に、二十名が参加して、朝八時過ぎに貸切バスで出発した。

コースの概略を記すと美麻―神城―親の原百体観音―千国宿（番所・牛方宿）―雨中宿（小谷郷土館）―大網宿（塩倉）―葛葉峠―戸土―越後総社（天津神社）―糸魚川市役所―直江津―須坂。

車中では、市川先生から家並やその土地の人々の生活についてユーモアを交えた話しぶりの中にいろいろ教えられることが多かった。

小谷村に入り親の原百体観音を見た。みな素朴な表情でこれを眺めていると心休まる思いである。住民に根づいた信仰の深さが伝わってくる。

次は、千国宿へ向かった。「千国街道」の名称は、千国という村の名からつけられたものである。

カヤ屋根の家が目につき、典型的な山あいの宿である。

現在は、六十余戸の集落であるが番所が置かれ、この千国番所は松本藩内に置かれた番所の中でも、特に重要視されたと言われる。

バスは、旧道と時々交わりながら上っていったが、この旧道は後日、ゆっくり歩いてみたいコースの一つである。

前方にカヤぶきの建物が見えてきた。「牛方宿」である。

一人の牛方が、約六十キロの塩俵二俵背負った牛数頭を追って歩いたというが、一階の土間の左手に牛を泊める部屋があり、その脇にある梯子を上って二階が牛方の寝る部屋になっている。今、千国街道を通じて残っている牛方宿は、ここだけだそうで、牛と共に労苦を友にした当時の人々の姿が脳裏に浮かんできた。

そのあと、小谷博物館を見学した。雪国の生活必需品や農具などを中心に展示してあったが、塩の秤やボッカの背負子、牛のわらじ等、千国街道の民俗資料が多数展示してあり興味深かった。

車は、大網宿の塩倉を見て信州北端の集落戸土へ向かった。周辺地域を合わせると多い時は、三十余戸もあり、分校もあったが、現在は一戸だけ。集落のある所では信州で海が見える唯一の場所である。

そのあと、バスは糸魚川へと走り、天津神社へ到着した。この神社の境内には、「信濃、松本、魚問屋」と彫られた常夜燈が二基あった。

信州と越後の結びつきが強かったことを物語っている。

「塩の道」巡検の最後は、糸魚川市役所前の奴奈川姫像であった。ここで記念撮影をした。

夕食を取り、糸魚川から帰途についたのは、七時過ぎであった。ちょうど海岸通りで出た時、今まさに夕日が能登半島のかなたに沈もうとしていた。海面は、きらきら光り、真赤な太陽があたりの雲をあかね色に染め、今日一日のわたしたちの巡検にふさわしいしめくくりであった。

信州へ送られてきた塩は、糸魚川の浜で生産されたものではないそうである。その大部分は、瀬戸内海産のものではるばる日本海を北上し、能登半島を迂回して、糸魚川へ陸揚げされたものであった。

まさに、塩の道は、海に続く道であった。

（須坂小）

研修を通して得たもの

大澤志保

四月、私達は念願のキップを手に新任校の門をくぐりました。

私の通う須坂市立常盤中学校は、新校舎の匂いが漂いまわりは緑に囲まれた学校であります。

新卒と紹介され六ケ月があっという間に過ぎました。見ること、聞くことが新鮮で又とまどい迷う毎日であります。

その中で新規採用者研修会初任者研修試行研修会と何回か校外研修へ参加させて頂きました。授業や行事と重なり何度か残念な思いをすることがありましたが、参加した研修では何かひとつ私にとっては心に響く言葉や体験ができたことをうれしく思います。

その中で、実際に体験したり、肌と肌とのふれあい、精一杯に生きることの姿を目の前に学ばせて頂いたのが『特殊学校教育』『ボランティア活動研修』でありました。

耳の不自由な子供達は、目で相手の口の動きや動作を見ながら人の話を聞こうとします。ある日、突然光を失った男性が立派に仕事につき家庭を守っています。手足が不自由でも体を精一杯使って何かを私達に語り、足でキーボードを弾きながら詩をつくって生きることの強さを私達に与えてくれます。そんな陰には力強くて暖かい御両親、先生方等々の姿も学びました。

今、私はこの研修で得た事を今後何かの形で生かせることができれば幸いと考えます。

さて、その他にも宿泊研修、教科研修と回を重ねましたが日程に組まれたひとつひとつの中で多くの指導主事の先生方のお話しを聞く機会や、今年教職一年目となる先生方と日頃の悩みを打ちあけ、語りあい、時には励まし合う仲間に出合えたことを感謝します。

教科研修では、技能教科を持つ私にとっては、小さなポイントを数多く学ぶことができました。今後の指導に十分生かせる様に努力したいと思います。

さあ、二学期が始まりました。学校の雰囲気にも慣れはじめた今、一学期での研修が十分発揮できるよう、前進したいと思います。

また、校外に出ていくことばかりが研修ではありません。日々の授業が、実践が大きな肥しとなります。と同時に私は生徒ひとりひとりの目、一クラス四十人、八十個の目の中で失敗を恐れずに学んでいきたいと思います。自分で選んだ道ですから―。（常盤中）

県外視察
氷との対話
―生活科の学習―

朝間春子

汗がひっきりなしに流れる。廊下、窓の外まで参観者であふれた教室で一年生の授業が進められた。ベランダにはスイカ棚、ミニトマトの鉢。三畳ほどの菜園には大豆、なす、オクラがみごとに実っている。この夏、大阪教育大附属天王寺小学校での生活科授業研究会に参加した。

本時は「たのしいなつやすみ」の中の「こおりであそぼう」であった。大阪では氷にふれる機会が冬より夏の方が多いということで夏の教材としても登場した。氷の冷たさ、心地よさを体感し、季節にあった生活の工夫に関心をもたせたいという願いから設定された授業であった。

一つずつもらった氷を大事に両手で持っている子、口の中へすぐ入れる子、机上を滑らせて遊ぶ子。一かけらの氷を与え氷を意識させることの意味を手の中で解けていく氷をじっと大事に持っている女の子の姿の中に見つけたように思う。続いて初めて見る大きな氷、様々な形の氷を使って自由に遊ぶ活動に入った。氷を抱いてきてはビニールプールへ盛んに投げ込む。水は大きく飛び散り全身にかかる。そのスリルに歓声を上げびしょぬれになりながら夢中になっていた。水に浮く氷を手を下に入れてそっととる子、手の冷たさを和らげようとハンカチで氷を包んだり、氷を通してハンカチの絵柄を友と見合っている子、「ローラースケートだ。」と言って氷を滑らせて遊ぶ子、金づちで氷をたたいて削る子と思い思いに氷と関わっていた。

まとめの段階で先生は、「どんなことがおもしろかったか。」と問うていた。生活科では意欲的に学習できたか、自分と一体となって活動できたかがポイントとなる。「氷さん、こんなに小さくなっちゃってかわいそう。」そんな気持ちが大事にされる。従来の「氷は溶ける。」「氷は水に浮く。」といった理科的知識は要求しない。子どもは氷との関わりの中でつねに氷と対話し、心を寄せ、活動に満足しきっている。その姿こそ生活科の学習である。私たちはとかくわかったことは何かと求めがちだが、その考えは堅いと指摘された。

平成四年度から始まる生活科、夢中になってとり組める学習を子供と共に創り出していきたい。（日滝小）

先日、産業センターの「家庭科情報処理」を受講させていただきました。前期三日、後期三日の研修で、忙しい学校を六日もあけていいのかしらと半信半疑でしたが、新CSでは「情報基礎」が親切されるのだから、早めに勉強してみてはとの推めでありがたく受けさせていただきました。

内容はパソコンの取り扱いLOTUSを使って家計簿の作製、栄養素の分類と検索、BASICプログラミング、FORTRANプログラミング、型紙作製、献立栄養分析、日本女子大教授による講演、「被服とコンピュータ」、そして自由課題でした。感想を箇条書きにします。

・内容も、扱った機械もいろいろで、充実して良かったのですが、ある程度キーボードに慣れていないと疲れて大変です。

・いくつもの計算式を打ち込んで、求めた形の型紙がプリントされると本当にうれしい。

産業教育センターの講座を受けて

関典子

・研修を終え、手元に文書の資料と二枚のフロッピーが残ったけれど、このフロッピーは学校のパソコンでは機種が違って使えないとのこと。栄養計算なんてすぐに授業で使いたいのに。学校ではパソコンは二台、ワープロとして使ったり、成績処理に使われていて、使うのに順番待ちということも新CSで「情報処理」と言っても、生徒が授業で使える程の数のパソコンが入るのだろうか。センターでは一人一台のパソコンが迎えてくれたので、伸び伸び格闘できたのだけど。

・この先、個々でテーマを持って自由にソフトを作るというような長期の研修もあるそうで、やってみたいと思うし自分でもパソコンが欲しいと思うのですが、お金がない！とため息をつくこの頃です。

・一日中パソコンの前に坐っていると、疲れることは疲れるのですが、俗世を離れた仙人のような新鮮な気持ちになります。生徒を叱ってばかりいると疲れる。研修を受けてあなたもリフレッシュしましょう。

最後になりましたが、センターの先生方、親切に御指導下さりありがとうございました。（東中）

火ばち談義

夏山寸描

西原隆雄

真青な夏空にすい込まれる緑のジュータン。そこに横たわる大雪渓。まさに、高山植物の宝庫、白馬岳（二九三三メートル）は圧巻である。

猿倉から白馬尻まではブナ林が続く。沢筋には、サワグルミやトチノキ・カツラが点在している。路端には、一メートルを越すオオイタドリ・シシウド・オオハナウドなど高茎の植物が繁茂し、タマガワホトトギスがときどき顔を出し、水分や土壌条件の良さがうかがえる。

白馬尻の周囲には、ベニバナイチゴ・キヌガサソウ・オオサクラソウ・シラネアオイの群落が目につき、高山植物の美しさに目をとめる。

いよいよ大雪渓の登山である。四ツ目のアイゼンをつけザックのパッキングを確認し、歩調のテンポと呼吸のリズムを合わせながら、二時間、一歩一歩進むのである。

雪渓では、気流の微妙な変化、周囲の植相等、快い。杓子岳に近付くと、左前方から「カラカラ」と落石音が響く。雪上には一メートルにもおよぶ岩石が並ぶ。しだいに、反響音が強くなる。間断なく落石は続くが、ほとんどはクレパスに砕け落ちていった。

歩を早め「葱平」をめざす。「ネブカダイラ」と読む。ネギのことを別名で「ネブカ」と言い、この地にあるシロウマアサツキからついた地名とのことである。ここから小雪渓を横断して頂上をめざす。

シナノキンバイ、ミヤマオダマキ、クルマユリに目をとめ、ハイマツの切れ目には、アオノツガザクラ、イワイチョウ、ウルップソウなどポピュラーな高山植物を楽しむ。

シロウマタンポポは、ミヤマタンポポに非常に似ているが、総包外片の先に小さな角があって驚く。シロウマオウギは、リシリオウギに似ていたがやや小ぶりである。

翌日、杓子岳に登頂し、下山した。途中、北安曇教育会の先生方の一行に出会った。北安では、新卒二年目には白馬登山の研修会があるとのこと、自分の足もとから直接学ぶことの大切さを考えながら、白馬を後にした。（相森中）

校章・校歌めぐり

高甫小学校

須坂市立高甫小学校 校歌

（昭和37年制定）

勝承夫作詞
平井康三郎作曲

麦の穂にかこまれた柿の花をあしらったものです。柿は八町柿として有名でした。また高甫は畑作地帯で麦作も多かったことから、冬の麦ふみ、桃栗三年、柿八年に象徴されるように、寒さ、暑さに負けず、強くたくましい人間に育ってほしいとの願いがこめられています。

☆　☆　☆

校歌が制定されたのは昭和三十七年です。この年高甫小学校は開校八十八周年を迎え、その記念事業の一つとして企画されました。

作詩は勝承夫先生、作曲は平井康三郎先生によるもので、勝先生が多くの学校の校歌を作詩されていることと、勝先生の詩には平井先生がよく曲をつけておられることから、このお二人にお願いするようになったようです。

勝先生が作詩のためわざわざ東京から高甫を訪れたのは昭和三十七年八月のことでした。地区内をつぶさに歩かれ、山からも見下ろされたり、村人や子ども達とも楽しく語られて、あの詩情豊かな詩がつくられたと聞いています。

その詩は平井先生が作曲されて、九月二十五日には曲をいただいて、秋の運動会に全校で歌ったと記録されています。

いま高甫小の運動会では、校歌が全校ダンスになっています。高甫出身の舞踊研究家後藤純夫先生によって昭和三十九年に振付けられたもので高甫小の誇りでもあります。

（湯本道雄）

温泉でのひと時

依田周二

夏休み。どこへ行くあてもない私。ふと思いつき妻とその両親を誘って一泊の温泉旅行としゃれこんだ、つもりだが行先は七味温泉。七味温泉といっても馬鹿にすることもない。昨今の温泉ブームのせいもあるのか、関西や東京あたりのナンバーの車もちらほら目につく。

宿に着くと早速女中さんが「遠い所、ようこそおいでくださいました。」とお茶を入れに来る。すかさず「山奥の静かないい所ですねえ。」と私。まさか「須坂から来た。」とも言えず、皆で一笑い。

義父と温泉につかりながら諸々の事に思いをめぐらす。「一学期を振り返ってなどというのには、とっておきの場だなぁ。」などと思いながら、子どもたちの姿を頭の中で追いかけてみる。騒々しい声が聞こえてこないのがちょっと残念だが、とてもゆったりとのんびりした気分になる。

そうこうしているうちに夕食の時間となる。囲炉裏を囲んで義父と飲みかわす酒。自然と会話も弾んでくる。そのうち囲炉裏に火が入る。真夏の囲炉裏火というのもなかなかおつなもの。しかし、暑い。そのうち窓の外で何やらガサガサと騒々しい物音。窓を開けるとなんとたぬきが数匹、物欲しそうな目でこちらを見つめている。女将の話では、毎晩夕食時になると向こうの山から橋を渡って並んでやってくるという。たちまちその数は十数匹に。残り物の肉や魚、野菜など投げ与えると争って食べる。何でもよく食べる。「キィーッ。」という泣き声を出してけんかしながら食べている。初めて見る光景でもあり、いつまでも見ていてもあきることがない。最後はもう与える物もなく、かわいそうだったが、たぬきたちとはお別れ。

部屋へ帰り、四人でトランプをやりはじめる。セブンブリッジだ。やっとの思いでてんぱって？カードを切ると「はい、それ当たり。」と義母の声。以外や以外、義母の一人勝ち。

夜中にまた風呂に行く。外には露天風呂があり混浴。驚いたことに若い女性たちが大胆にもカメラのフラッシュをたいているようで「キャー、キャー。」騒いでいる。思わず尻ごみしてしまう私。

そして、また一人静かにつかる露天風呂。こんな温泉でのひと時を皆さんも味わってみては。

（森上小）

編集後記

庭で鳴くせみの声にも芭蕉の句が思い出される夏らしい夏休みでありました。二学期に向けてエネルギーを蓄えられたでしょうか。お忙しい中、原稿をお寄せ下さった先生方、ありがとうございました。

（中嶋・望月）